

地域生活を支える  
社会福祉法人  
第215回

社会福祉法人 四日市福祉会 [三重県四日市市] の試み



# 障がいがある方が地域の一員として まちづくりに参加できる環境をつくる

障がいがある方がたが地域のなかで活躍できる場をつくり出し、  
生きがいをもって自立して生活ができる支援を行う。  
法人と地域住民がともに協力しあい明るい未来をつくっていく

## 四日市福祉会

### 法人名

社会福祉法人 四日市福祉会

### 本部住所

〒510-0007  
三重県四日市市別名三丁目3番10号

### URL

<https://www.blooming.or.jp/>

### 理事長

柏木 三穂



### 事業内容

- 障害者支援施設
- 障害福祉サービス事業
- 特定・一般・障害児相談支援事業
- 障害児通所支援事業
- 認定生活困窮者就労訓練事業
- ガソリンスタンド、  
ベーカリーショップの経営



四日市福祉会が本部を置く「垂坂山ブルーミングハウス」(三重県四日市市)。



ご利用者の“こころの支援”に重点を置き、地域住民の方がたにも協力をしていただきながら社会の一員として自立できるように事業を展開している。

## 社会福祉法人 四日市福祉会の沿革

昭和19年、三重県四日市市でモーター製造会社を立ち上げた柏木 巖氏は、創業以来、地元で暮らす障がい者や高齢者を積極的に雇用してきた。昭和31年に羽津地区に本社工場を移転し、平成6年、同地区の住宅街に四日市福祉会を創設。柏木氏が理事長に就任し、「障がいのある方が自立して、地域とかかわりをもって暮らせるように」との想いで障がい者の就労支援を本格的に開始した。平成7年には、知的障害者の入所施設である「垂坂山ブルーミングハウス」を開設。パン工房「ブルーミング」での就労支援をはじめ、地元で活躍できる場を生み出している。

現在、グループホームや多機能型事業所など8つの拠点で事業を展開。2代目理事長となった柏木三穂氏は、「ご利用者の皆さんの才能が芽吹き、夢が花開くように」との想いを込めて、各施設の名称に「BLOOMING（ブルーミ

ング)」を冠したという。ガソリンスタンドやカフェを経営し、地域とつながりをもって働ける場をつくることで、障がいがある方の社会的自立と自己実現をめざす。

## 社会福祉法人 四日市福祉会の 理念と方針

### 【法人理念】

#### ●周囲を大切に思い理解に努める

私たちは、様々なものと関わりながら生きています。四日市福祉会は、相手の立場に立って理解し合い、深く協調・協力し合うことを大切にしています。また、人だけでなく自然環境や普段利用する道具、設備など、自分自身を取り巻くすべてのものに対して思いやりを持ち、日々の業務に取り組んでいます。

#### ●自立を支える

自立とは、経済的・精神的・社会的に自分自身の力で立つことができる状態であり、福祉分野では、「自己決定に基づいて主体的な生活を営むこと」「障がいを持つ

ていても自身の能力を活用して社会活動に参加すること」です。利用者の方が自立するための支援を行うことはもちろん、四日市福祉会で働くすべての職員が様々な面で自立することができるような環境を提供できる組織となることを私たちは目指しています。

#### ●より多くを学び成長する

人は、いつまでも成長し続けることができると信じています。私たちは、多くのことを学ぶ姿勢を持ち、成長を続けることによって、明るい未来を切り拓きます。そして、明るい未来を四日市福祉会に関わるすべての方と一緒に共有することが、私たちの希望です。



羽津地区連合自主防災会議に参画し、法人主催のマルシェと合同で地域の避難訓練を実施。マルシェの会場で、炊き出しや防災備品の展示なども行っている。

四日市福祉会  
の試み

Case 1

# 地域から愛され、安定した ベーカリーの経営で 利用者の自立を支える



平成20年、パン工房「ブルーミング」を「Bakery Shop Blooming」としてリニューアルオープン。入口には石畳を敷き、店内にイートインスペースを設けた。

四日市福祉会では、平成7年に障害者支援施設を開所して以来、「自立を支える」を理念に掲げ、パン工房「ブルーミング」でのパンの製造・販売に力を注いできた。粉から仕込んだ生地を発酵させて焼き上げる本格的なパンは、地域で評判が高く、工房内のベーカリーショップや法人が経営するガソリンスタンド阿倉川サービスステーションに併設のカフェ「ばんカフェ blooming」で販売し、市内の飲食店にも卸している。

「自立するためには、誇りをもつことが大切です。地域の皆さんが『おいしい』といって買ってくださるパンを自分たちがつくって売っていると、利用者の方に誇りをもってほしい。『おしゃれなパン屋さんで働いている』と、ご家族に自慢したくなるような店舗構えにすることにも気を配りました」(柏木理事長)

平成20年にはパン工房を全面改装し、すべて自己資金で設備投資した。これからはさらに地域への

周知やリピーターの獲得に力を入れ、利益を確保して安定的な経営を続けていきたいと考えている。

また、冷凍している在庫のパンを活用した地域貢献にも取り組んでいる。「パンdeサークル」は法人職員の発案で、冷凍パンを袋詰めし、民生委員を介して生活困窮者などへの食料支援を行う取組。民生委員からは、「パンをお届けすることでお宅を訪ねやすく、困りごとを聞きやすくなった」と高齢者の見守りに一役かっている。

民生委員の方がたからの情報で、コロナ禍でなかなか再開ができない子ども食堂でデリバリーを行っていると聞いた際には冷凍パンを提供。子ども防災キャンプが行われた際にもパンを提供するなど新たな取組にもつながっている。

パン工房を開設して間もない頃は、初代理事長が障がいのある方を車に乗せ、一緒にパンを配達しながら地域を回ったことがあるという。現在は、ご利用者が店頭立ち、販売を行い地域の方がたと

のつながりを強めている。

法人では、ご利用者の活躍の場を広げるだけでなく、障がいがある方がたを積極的に雇用し、現在は8%を超える障害者雇用率を実現している。生活保護受給者の方や一般の企業ではなかなか長期で働くことが難しい方、引きこもりだった方などの受け入れを各事業所で行い、ご利用者だけでなく社会的に支援が必要な方がたを法人としてサポートしながら、皆が地域で認知され、活躍できる場を広げるためにさまざまな取組を行っている。



朝7時に開店する「ばんカフェblooming」では、モーニングサービスやランチも提供している。「パンがおいしい」「駅前にあって立ち寄りやすい」と、地域住民の間で評判が高い。

四日市福祉会  
の試み

Case 2

# ガソリンスタンドを経営し 利用者が活躍できる環境を広げながら 地域に貢献する場をつくる



セルフでの経営だが、手伝いが必要な時には笑顔で対応する親切な接客が地域の方がたに喜ばれている。

手洗いで洗車の技術を磨いたご利用者のスタッフ。車1台を3人で担当し、ていねいに磨く。

四日市福祉会は平成28年より、セルフサービスのガソリンスタンド「ブルーミング阿倉川SS(サービスステーション)」(以下「阿倉川SS」)を経営している。

平成26年、隣駅のガソリンスタンドが廃業。利用していた近隣住民が不便に感じているという話を聞き、地域のために貢献したいという思いから同じ場所でガソリンスタンドの経営をはじめた。社会福祉法人がこの業界に参入するのは珍しいことではあったが、法人の考えに出光興産が賛同してくれた。

「出光興産さんが社是に掲げている『人間尊重』は、私たちの法人理念にも通じると思い、当時の社長宛に直接、手紙を送りました。熱意と運営計画を出光興産の社員の方にもご理解いただき、協力を得ることができました」(柏木理事長)

企業側も、障がい者の雇用創出や新たなビジネスモデルを模索していたところで、事業を通じて社会貢献をめざす両社の方針が合致

した。出光興産による運営指導のもと、2年がかりでサービスステーションを開設した。

知的障害者の通所施設のご利用者としてともに働き、「多様性」を尊重する職場であることを店頭に掲げている。開設当初は、障がいがある方が手洗いで洗車やセルフ方式の給油作業をサポートできるのかと不安に思う利用者もいたが、研修を積んでいねいに作業する様子や、親切に接客する姿を見ることで、いまでは信頼を得ている。

阿倉川SSの利用客は高齢者が多く、セルフ方式に慣れていない方には代わりに給油するなど、スタッフがこまやかにサポートしている。「親切なガソリンスタンド」として広く知られるようになり、地域で頼られる存在となっている。

また、一緒に働いている地域の方がたも、障がいがあるスタッフの言動に、はじめのうちは戸惑いを見せたが、法人職員に相談して

個々の障がいの特性を少しずつ理解し、適切にフォローできるようになっている。

「一緒に働きはじめて1~2か月もすると、皆さん、構えることなく接して下さいます。障がいのある方を支えることができることに、喜びを感じてくださっている様子もありうれしく思っています」(柏木理事長)

併設している「ばんカフェblooming」を目的に立ち寄り客も増え、ガソリンスタンドが地域住民の憩いの場となっている。

また、「阿倉川SS」を地域防災の拠点とし、災害時の緊急車両や地域住民への燃料供給などを検討。定期的に発電機稼働訓練を職員全員参加で実施し、帰宅困難者への一時避難の受け入れや食糧の提供に向け体勢を整えている。

四日市福祉会  
の試み

Case 3



施設を利用して運動教室を実施したことで、教室に参加した地域住民とリハビリを日課にしているご利用者が活動をともにする機会も生まれました。

## 運動教室を開催し地域住民の健康増進を図るとともに施設への理解を促す

平成28年、ご利用者の高齢化に伴い入所施設を改修し、リハビリテーション室を新設した。理学療法士を正規雇用し、障がいの特性に合わせてリハビリテーションを考案して健康寿命を延ばそうと考えている。ご利用者は生活支援員のサポートを受けながら、日常的にリハビリに取り組んでいる。

「障がいがある方が取り組めるリハビリは、これまで体系化されてこなかった分野です。広く活用してもらえるようにしていきたい」と、理学療法士の伊藤 賢氏は意気込みを語る。

リハビリ室の整備をきっかけに、地域のためにできることを考えようと、ニーズ調査を開始した。調査に利用したのは法人のイベント「ブルフェスタ」。施設に足を運んでもらうために、平成18年から毎年開催している。スタンプラリーやバザーなどの催し物を一日中楽しめる行事で、子どもからお年寄りまで500名以上の地域住民が集う。そこに健康サ

ポートコーナーを設け、看護師と協力して体組成計での測定や骨密度検査を実施。健康管理のアドバイスをを行い、健康意識にかかわるアンケートも取った。

そのアンケートをもとに、理学療法士が指導にあたり、主にマシントレーニングを中心とした筋力、体力強化を行うことに目的を絞った「運動教室」を実施し、65歳以上の地域住民5～6名が参加した。参加者からは、「専門家に指導してもらい安心して参加でき、効果も実感できた」といった感想が寄せられ、次回開催が期待されている。

参加者のなかには障がいがある方のいる施設ということに不安感を抱いていた方もいたが、実際に施設内でご利用者を見かけたり、ご利用者が一緒に運動教室に参加することもあり、「障がいがある方が落ち着ける環境で生活を送っていることがわかった」「サポート体制がしっかりしていることを知って安心した」と、施設への理

解にもつながっている。

「私たちが地域に出向くことも大切ですが、地域の皆さんに施設にお越しいただいて、障がいがある方がたをより身近に感じていただくことも重要だと考えています。ブルフェスタや運動教室のように、地域に開かれたイベントをこれから増やしていきたいと思えます」(柏木理事長)



ブルフェスタに設けた「いきいき健康サポートコーナー」でアンケート調査を行い、地域住民が健康やリハビリに興味があるかを調べ、施設での運動教室の実施につなげた。

四日市福祉会  
の試み

Case 4



毎年、29時間オールナイトで開催される四日市徹夜踊りの祭典「よんてつ」に参加。ご利用者も、一日中手伝いたいと自ら申し出て協力し、打ち上げの会にも招かれて親睦を深めている。

## 障がいがある方も地域の一員となってまちづくりに参加

法人がある羽津地区には、平成25年に発足した各種団体や住民代表で組織されている「羽津地区まちづくり推進協議会」(以下「まち協」)があり、地域づくりを総合的に進めている。10の部会と4つの委員会で構成され、それぞれがまちづくりのために各種事業を展開。四日市福祉会は「障害者福祉部会」をはじめ、常任理事会、総務委員会、健康推進部会、地区の連合自主防災会議に加わって活動している。

法人職員の金原 真由美氏は障害者福祉部会の会長・副会長を歴任しており、地区内で行われているイベント「はづ餅つき大会」をバージョンアップさせて、障がいがある方の作品展を同時に開催することを企画。絵画や陶芸などの作品を展示し、障がいがある方の才能や魅力を伝えている。

毎年500名以上が参加する食のイベントであるため、法人が主体となってマスクや手袋の着用を義務化するなど、イベントが安全、

安心に開催できるようにサポートしている。

法人職員と一緒にご利用者もまち協の行事に参加し、地域住民との接点を楽しんでいる。イベント時の会場の設営や撤去を行うときには、「いつも法人のみんなが手伝ってくれて助かる」と地域の方がたの感謝の声を直接聴くことで、ご利用者もやりがいを実感している。

「地域の方がたが対等な立場で、分け隔てなく接してくださることがご利用者の皆さんも私たち職員もとても嬉しく思っています。毎年、イベントへの参加を楽しみにしています」(柏木理事長)

まち協との合同での取組はほかにも、四日市ドームで開催される「四日市徹夜踊りの祭典“よんてつ”」へのボランティアスタッフとしての参加や、「羽津地区連合自主防災会議」に出席し、合同訓練などを行っている。

また、新型コロナウイルス感染症対策では、法人内に感染対策

ワーキンググループを立ち上げ、法人内でのBCP(事業継続計画)の策定を進めており、いずれはまち協との連携もしていきたいと考えている。

「まち協との協働で地域の課題が見えてきたり、民生委員とのつながりができたりと、法人がかかわることができる支援の幅が広がっています。地域の皆さんと一緒にまちづくりを盛り上げて、羽津地区の未来をつくっていききたいと思えます」(柏木理事長)



食のイベントを開催する前には、保健衛生の研修を行い、検便を徹底。法人が率先して感染症対策にあたっている。